

# とある輝夜の時間操作 《タイムオペレーション》

荒川紅蓮

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

学園都市に住む一人の少年、輝夜永斗。

LEVEL5の末端に位置する彼は、末端でありながらLEVEL5序列第一位とは親友である。

科学と魔術が交差するとき、物語は始まる。

そして、まだ科学と魔術が交差していないところで、彼の物語が始まる。

# 目次

平穏な日々	
第一位と第八位	1
いつもの日常	6
入学式	12
表裏	20
ゆがんだ絆	27
遭遇	34

平穏な日々

## 第一位と第八位

学園都市。

その土地の一部を神奈川や埼玉に及ばせながら、東京都中央の約三分の一を占める総人口230万人の円形巨大都市。ここは総人口の約八割が学生であるためなのかはわからないが、学園都市と呼ばれている。

さて、そんな学園都市では『超能力開発』がされている。小難しく言うと、人間の脳を開発をし能力者として開花させる技術である。

ここで重要なのはあくまで「素質のある人間にのみ」能力が開花するということだ。

開花した能力はその大ききでランク分けされる。

無能力者と呼ばれるLEVEL0

低能力者と呼ばれるLEVEL1

異能力者と呼ばれるLEVEL2

強能力者と呼ばれるLEVEL3

大能力者と呼ばれるLEVEL4

超能力者と呼ばれるLEVEL5

さて、そんな学園都市で今日ものんびり過ごしている少年がいる。

これは学園都市で「八人」いるLEVEL5のうち、序列八位の少年

年のお話——



学園都市も一応日本なので冬がある。

二月中旬、未だに寒さが衰えないこの時期。そんな中、フラフラと歩く少年がいた。

「うう〜、寒い」

自分の肩を抱きながら震えている少年は、ちょうど見つけたファミ

レスに足を踏み入れた。

「いらっしやいませー」

「あつたけえ〜♪」

暖房の効いた場所を確保し、少年はとりあえず席についた。受験シーズンと呼ばれる時期で、もちろん彼も今年受験生なのだが一切そのような雰囲気はない。

暖をとって幸せオーラがまき散る彼の向かい合わせの席に、客が腰を下ろした。

「相変わらず暇そうだなア、輝夜」

輝夜と呼ばれた少年、輝夜永斗。

大して珍しくもない黒色の髪に茶色の強い瞳。顔は比較的整っている方で、現在幸せオーラ全開なので非常に好意的な印象だ。

「ん？ああ、<sup>アクセラレータ</sup>一方通行か」

対して一方通行と呼ばれた少年は、病的なほど白い髪に赤い瞳をしていた。彼は決して病気などではなく、彼の能力のせいでそうなっているのだ。

「どうした、お前がひよっこり顔を出すなんて」

「腹ア減ったから飯食いに来たんだよ」

「まあ、ファミレス来て飯食わないのは変だしな」

幸せオーラをおさめ、一方通行を見る。

注文した料理が届き、一方通行はそれを食べようとした寸前、輝夜の視線に気づいた。

「…なんだ？」

「いや、相変わらず白いなーって」

「うるせエよ」

見るだけで腹が膨れるほど肉の塊を食し始めた一方通行。輝夜は若干引き気味にそれを見ていた。

輝夜が注文していた焼き魚定食（どこからどう見ても定食）が届き、一方通行と同様に骨など一切無視で食べ始める。

その間、二人は無言で手と口を動かしていた。

ふと、何かを思い出したように手をパンつと叩き、輝夜は肉にがつ

つき続けている一方通行に声をかける。

「ちよいちよいレータくん」

「その呼び方やめろ」

「高校どこ行きますのよ?」

「ああ? 高校なんて行くわけねエだろオが」

その言葉を聞き、輝夜はニヤリと笑う。

ヤバイ、と一方通行は身構えるも時すでに遅し。

「そう言うと思って準備してました! レータくんの入学申込書お!」

「はアアああ!」

驚愕で肉を食べる手が止まった一方通行を無視して輝夜は続けた。

「ほら、歳考えてみよーよ? 俺ら今年受験生のはずだろ? そこでふと学生生活送りたくなつたのよな。というわけでレータくんも一緒に行こう」

勝手すぎることを言う輝夜に、一方通行は開いた口がふさがらなと言わんばかりに呆然とする。補足だが、輝夜の発言から彼自身も学校に通っていないことがわかる。

学力的には問題の無い二人だが、『しかるべき学生生活は何物にも変えがたい宝である』とテレビで聞いた輝夜はその言葉に共感し、今に至るのだ。

「ふぎげんな! なんでお前のお遊びに俺まで付き合わなきやならねエんだア!」

再起動を果たし、全力で反論を開始するが輝夜はコロコロと笑いながら、

「いいじゃんいいじゃん。高校生ぐらい普通にやっても罰当たらねえって! な、いいだろモヤシ?」

馬鹿にするように、というより馬鹿にしながら笑う輝夜に、一方通行はふつつつと怒りで沸騰しかけている。

「テメエ、ケンカ売ってンのか?」

「俺は平和主義だよ? 喧嘩なんて野蛮なことしないしなくい」

「ふぎげんな、テメエのどこが平和主義だつてんだ」

「見てわからない?」

「腹黒ってことアわかる」

「喧嘩売ってる?」

「やるかア?」

「嫌だ」

「……………見せろ」

完全拒否された一方通行はため息をつき、輝夜が持っている分厚い封筒をかつぱらった。

封筒を奪われた輝夜は、一瞬キョトンとするもすぐに笑顔を浮かべた。

妙に分厚いなアとボヤきながら封筒を破り開けた一方通行は中の書類に目を通した。

「へエ、確かにここなら普通に過ごせそオだなア」

「でしょ? なかなかいいと思うんだよねえ」

彼が口にしたのは、学園都市の第7学区にあるどこにでもある何も変哲のない高校。在学している能力者で最高レベルが2。彼らとは天と地の差があるが、輝夜はその高校を推しまくった。

「つーかよオ、なんでこんな高校なんだア? 俺もお前も学力で行きやア長点上機学園だつて行けんだろオがよオ」

「ええ〜! だつてあそこエリートどもの集まりじゃんか。それこそ俺らモルモットにされるぜ?」

「LEVEL5になつてる時点でモルモットだろオが…」

文句を言いながらもペラペラと書類をめくっていく一方通行は、学園都市最強のLEVEL5で序列一位。

輝夜は同じLEVEL5だが、序列は八位と大きく差がある。それでも二人は仲良しなのだ。

書類を読み終わり何かを言おうとする一方通行をさえぎり、輝夜は爽やかな笑顔を一方通行に向け、

「ちゃんと書き忘れないようにしろよ? 入学手続きができませんでしたとか笑えないからね」

「わアつてる……………つて、勝手に決めンじゃねエ!」

「認めたね? 今認めたよね? 認めた、はい決定」

「……もオ好きにしろオ」

反論できず論破された一方通行は再び肉に向かう。

輝夜もうんうんと頷いて魚に向かう。

二人のLEVEL5は親友同士であるため、根本的には似た者同士のだった。



## いつもの日常

「つーかよオ、マジでなんでこの高校なんだア？」

現在、<sup>アクセラレータ</sup>一方通行と輝夜永斗は来年度から登校することになったとある高校に足を運んでいる。その一方通行は、その高校のパンフレットを見ながらボヤいていた。

彼は行きたくないと言ったのだが、輝夜から《超丁寧》にお願いされたので、ついて行かざるを得なかった。

「なんでって、そりゃアレよ。自由気ままな校風に引かれたから」

「ナニ戯言ほざいてんだボケ。んな理由でお前が選ぶわけねエだろオが」

「ええ〜？結構真面目に考えたデタラメなんだけどなあ——あ」

「詰んだな」

「…はあー」

輝夜は己の失態を認め、ちゃんとした理由を話し始めた。

「ほら、お前はあんまり興味無いかもしれないけどさ、学園都市の都市伝説ってわかる？」

「ああ？都市伝説つーとアレか？能力の効かねエやつがいるとか」

「おつ、正解！なんだ、レータもそういうのに興味あるのか」

「レータ言うな、ネット見てたら見つけただけだ」

「第一位が何もしないでネットとか引きこもりやんクソワロタ」

「テメエ殺されてエのか？」

「冗談だつて」

舌打ちした一方通行は並んで歩いている輝夜の横顔を見やった。

苦笑を浮かべながらも楽しそうに話す輝夜を見ると、怒る気も失せてくる。

第一位の自分が唯一認める友であり、また、自分がどう足掻いても勝てないと思いきらされた相手。なぜ第八位に収まっているのか不明だが、聞いても素直に教えるわけがないと諦めている。

「そんで？その都市伝説がどオした」

「あー、そうそう。その都市伝説の正体が俺らの行く高校に入学す

るっていうんだよ」

「…どこから情報引つ張ってきやがってんだ」

「ネット」

「完全にテメエも引きこもりじゃねエか」

「ネカフエで見たんだから引きこもってはなない！」

「いやそれ堂々と言ってもほとんど同じだ」

違うと喚く輝夜の声を反射し、一方通行はため息をつく。

輝夜は基本的にボケでツツコミが不在の場合、無限のボケ地獄に陥らせるという能力がある。もちろん、これは超能力ではなく素である。

(この話術で第八位に収まったのかア…?)

学園都市のトップであるアレイスターがコイツに乗せられるとは考えづらいが、コイツならやりかねないと考え直す。

ようやく隣のボケが落ち着いたようなので反射を解除すると、ちよんちよんと肩を突っついてきた。彼の反射は輝夜に効かないということははずつと前に承知済みなので驚いたりはしない。

「どオした？」

「ほれ、あそこの郵便局」

「ン？」

輝夜が指さした方に目をやると、そこにあつた郵便局に重厚なシャッターがおろされていた。

「今日って定休日じゃないよな？」

「ああ、通常営業日だ」

はつきり言つて一方通行としてはどうでもいいことなのでさつさと立ち去りたい気分だ。その彼とは真逆に輝夜は気になるようでシャッターとにらめっこしている。

「ヤベ、超気になるわ」

「やめとけ、面倒事に首突っ込むンじゃねエ」

「えー…」

「高校の手続きに行くンだろオが。わざわざついてきてやってンだ、道草食つてンじゃねエよ」

「はあー、わかりましたよー……」

しよぼーんとしながら輝夜は渋々一方通行に従った。

一方通行は反論しない彼に若干驚いたが、表情には出さなかった。逆に、久しぶりに輝夜を論破（？）した爽快感の方が上回っていた。

そのはずなのだが――

「もう終わらせたからね」

「……なんだと？」

一方通行が先ほどの郵便局がある方向に目を向けると、そこには郵便局を襲ったのであろう犯人と思われる覆面男数人が道路に横たわっていた。

もちろん、全員気絶しており口から泡を吹いている。

ポカーンとする一方通行の耳に、警備員アンチスキルの到着を知らせるサイレンが聞こえてきた。

怒涛の展開に一方通行は輝夜を睨みつける。

「能力、使ったな？」

「おう、時間歪めたついでに空間も歪めて全部解決してやったぜい」

「……相変わらずチートくせエ能力だア」

「何でもかんでも反射するやつよりマシだと思っただけだ」

タイム・オペレーション  
時間操作。能力名の通り時間を操作できる能力で、その気になればタイムスリップすら可能とされる能力。その副産物として時間を歪めるどころか空間すら捻じ曲げてしまうという、一方通行以上の能力と言えるもの。

一方通行は首をコキコキ鳴らし、輝夜を見た。

「なんでお前が第八位なのかわかんねエなア」

「わからなくていいよ？どうせつまんない理由だからね」

そんなことは気にしないで高校にレッツゴー！と輝夜はテンションを上げた。一方通行はこれじゃ答ええないというのがわかり渋々ついていった。

一方通行は気づけなかった。

テンションを上げている輝夜の目に、うつすらと悲しみの色が浮かんでいたことに。



輝夜と一方通行はようやく、ようやく入学予定である高校にたどり着いた。

なぜようやくが二度欲しかったのかというところ……

『あれえ？ここどこだっけ？』

『オイ、迷子とか冗談じゃねエぞ』

『……アハハハ』

『冗談じゃねエぞ……？』

『アハハハ……、迷った』

『なんでもいつもテメエは道に迷うんだよオオ！』

そう、輝夜は重度の方向音痴なのだ。

地図を見ても目的地と反対方向に行くのは日常茶飯事、時には右と言っているのに左に行くというほどのものである。

一方通行もそのことをすっかり忘れており、あの郵便局から高校にたどり着くまで、なんと一時間も消費していた。

「二度とテメエが先に歩くな、いいな？」

「はい……」

「チツ、何もなかったからよかったがな……」

どよーんとした輝夜を後方につけ、一方通行は校舎を見上げる。

目の前には校門、ごくごく普通の平均的なもの。どこも突出しておらず、ただ普通に普通のことを教えてますよーという雰囲気が出ている。

「あつ、君たちが入学予定の人達なのですかー？」

声のする方を見ると、そこには身長が異様に小さい子どもがいた。

なぜ高校にこんな餓鬼がいるんだと一方通行は眉をひそめる。と、その時彼の後ろにいた輝夜が前に出てきた。

「そうです。これが入学申込書で、こつちが――」

「オイ輝夜。何だこの説明不能な生き物は？つーか何でこんな餓鬼に丁寧喋ってやがんだ？」

「えっ、レータ知らないの？この人先生だぞ」

「……………は？」

「そうなのですよー。名前は月詠小萌なのですよー」

輝夜が先生と言った餓鬼がエツヘンと腰に手を当ててふんぞり返る。

「こう見えても先生は普通に大学を卒業して学園都市にやってきたのですー！」

「…どオなってやがんだ」

「まあまあ、細かいことは気にしない気にしない」

「いや全然細かくねエよ」

「一方通行？細かいことは気にしないよねえ…？」

一瞬、ほんの一瞬。一方通行は輝夜から反射できないほどの重圧を感じた。

「はいつ、気にしませんッ！」

「よろしい」

にこやかに頷き、輝夜は再び子どもセンサーと話し始める。その間、一方通行は終始無表情で気をつけの体勢をしていたとか。



その後いろいろと書類の手続きを（主に輝夜が）終わらせ、二人は帰路に着いていた。といってもまだ昼過ぎであり、これから帰っても暇なだけだ。

「オイ輝夜」

「ん？」

「ゲーセン行くぞ」

「えっ、今日もゲーセン行くのか？」

「つたりめエだろオが。勝ち逃げかましてンじやねエぞコラ」

「お前に勝てるやつはゲームくらいしかないからなハツハツハ」

「ナニほざいてンだボケ。あらゆる面で俺より上回ってるだろオが」

「いやいや、ゲームの腕から力の差、ガラの悪さは完全にお前より下――」

「反論出来ねエけど結構ひでエこと言いやがるな!?!」

「自覚してるならいいじゃないの」

ということ二人は第六学区のゲーセンに行くことにした。

ゲーセンに着いた後二人が勝負を開始したのは言うまでもないことだが、その結果は毎度のごとく引き分けになっていた。

## 入学式

学生の朝は早い。

今年度から学校に行くようになった輝夜永斗と一方通行アクセラレータは、あくびを噛み殺しながら制服に着替えていた。一方通行は遅刻やら皆勤賞などはどうでもいいことなのだが、輝夜は入学初日から遅刻することは避けたいのである。

「よし、今日から学校生活楽しもー」

「眠イ…」

朝日を浴びて伸びをする輝夜は清々しい気分で歩き出した。それと対照的にのろのろ歩いて目を細くしている一方通行は明らかに不機嫌だ。いつもなら寝ている時間だから仕方のないことなのかも知れない。

ついでに言えば――、

「オイ輝夜、学校はこつちだ」

「……そうだったねー」

輝夜の方向音痴がそれに拍車をかけている。

せっかく早く起きても道に迷って遅刻するなど言語道断。遅刻やら皆勤賞などはどうでもよくても、道に迷って遅刻することは拒否したいことらしい。

「それじゃ気を改めてレッツゴー」

「……………」

大丈夫なのか？と意気揚々と歩き出す輝夜を見ながら、一方通行は頭を押さえた。

高校の制服で身を包んだ一方通行に輝夜は新鮮味を感じながら、桜

の花が咲き乱れる道を歩く。

入学申込書を高校側に渡した翌日、二人には受験関係の書類の代わりに合格通知が届いた。

その時に一方通行がポカーンとした表情を浮かべ、それを見た輝夜が腹を抱えて笑うということがあった。もちろん大笑いした彼に一方通行からキツイ一発をもらったのは言うまでもない。

話は戻り、二人の通う高校は第七学区にある。

元から二人は第七学区にある学生寮を使用していたため好都合であつた。

一応二人は同じ部屋で寝食をともにしている。何故かという理由は確かにあるのだがその理由がくだらなすぎるためここはスルーしておく。

「テメエが能力使えば一瞬で学校に着くのになア」

「そんな無駄なことに俺を使うな。一応これは一定の代償と引き換えに使ってるんだから、そんなにホイホイと使うわけにはいかないの」「代償？ンなもんあれだろうが、体力の無駄とかだろ」

「お前馬鹿か？」

「少なくともテメエより馬鹿じゃねエな」

「むっかあ！言い返せないけど無性に頭に来る！」

話しながら歩くこと数分。

二人は今年度から入学することになった高校にたどり着いた。



入学式。

幼少のころから特別扱いされてきた二人は、文字通り生まれて初めて体験する行事に少なからず興味を抱いていた。

新入学生は自由席らしく、二人は無難に後列の方に座った。席に着くと一方通行はすぐに寝息を立て始め、輝夜は寒そうに身を縮こまらせていた。

あちこちで入学生たちが小声で、一方通行を見ながら話している。



容姿もさる事ながらオーラが異常なのだ。寝ていてもそれは変わらない。

『これから——』

「レータ、そろそろ起きなはれ」

「シー……ああ？興味ねエから寝る」

「ふーん？あ、そう言えば数多の野郎元気にしてつかなあ。入学式に来れるか聞いてみ——」

「よし、ちゃんと話を聞こうか輝夜クン。ダメじゃないか入学式で携帯なんていじっちゃセンサーから怒られるよ？」

「……そだね、うんわかった。俺が悪かったねそうだねだからキャラ戻っていつもの一方通行に戻って」

これ以上のキャラ崩壊は彼の印象に深い打撃を与えてしまうと考えた輝夜は、入学式をしていることを忘れその場に土下座した。

『これで入学式を終わります。新入生たちのクラス割りについてはお手元のプリントに書いてあるので御確認お願いします』

そうこうしているうちに入学式は終わり、輝夜と一方通行はクラス割りのプリントに目を通した。

「んー、俺の名前はと……」

「あつたぞ、一年七組」

「サンキュー……、つてお前も一緒じゃん」

「レベル5を別々のクラスに置くなんつーことアやらねエだろ。一緒に監視できりや楽だしなあ」

ぞろぞろと入学生たちがそれぞれの教室に向かう波に飲まれつつ、二人は七組の教室にたどり着いた。

二人のクラスメイトは総勢三十二人。一方通行は

「どこにいるのかなー、噂の都市伝説」

「自己紹介があんだろオが。その時にわかんだろ」  
「そだね」

黒板に書いてあった席に座ると、担任の先生が入ってきた。

そう、新入学生の男子生徒たちは期待していた。

豊満な胸、大人の色気をかもし出す顔、細く美しい脚など。あわよ

くばそんな先生とアレな関係に……、などなど。

期待に胸を膨らませる中、その教師は入ってきた。

彼らの期待を見事に裏切った担任。

見た目10歳前後の女性（女子？）教師だった。

「はじめまして、私があなた達の担任を勤める月詠小萌なのです」

その言葉に動揺する男子生徒女子生徒たち。

一度会ったことがある輝夜と一方通行は、席が隣同士になったためテキトーに世間話をしている。

教室中のざわつきが収まったのは約三分後。長いのか短いのかはわからないがクラスメイトの自己紹介が始まった。

まず出席番号一番から始まるこれは、出だしから輝夜たちの予想を遥かに上回るものだった。

「名前で呼ばれるのは好きやないので、見た目通り青髪ピアスでよろしゅう頼むわ。青ピでもええで。好きなものは女の子やー！」

「……………」

と自らを変態であることを隠そうともしない自己紹介を行った青ピ。これには一方通行もさすがにドン引きしていた。一方通行ですらこのなのだから、他のクラスメイトたちも完全に引いていた。

そして出席番号三番である一方通行の自己紹介の番となった。輝夜は隣でニヤつきながら彼を見る。

「アクセラレータ二方通行だ、名前は気にすんな。好きなもンブラックコーヒー、これからよろしくウ」

レベル5であることを伏せたのは妥当な判断だろう、と輝夜は軽く目を見開きながら考えた。

席に着いた一方通行がこちらを見て、

「(ンだア？俺がまともに自己紹介するとは思わなかったって言いたそオな顔だなア)」

「(わかってくれて何より、一言一句間違っでないよ)」

舌打ちをして外を見る一方通行に輝夜は笑みを浮かべた。先ほどの馬鹿にするような笑いではなく、まるで自分の子供が成長したのを喜ぶような笑顔だった。

そして自己紹介は進み、出席番号十二番の輝夜にまわってきた。

「輝夜永斗。好きなものは紅茶かな？ま、これからよろしく」

テキトーな自己アピールで、最低限のことを言って席に座る。一方通行の方を見ると、彼は頬杖をついて居眠りしていた。

(人の自己紹介くらい真面目に聞こうよ…)

輝夜が席に座ると、後ろの席の生徒が自己紹介を始めた。黒髪のツンツン頭で、どことなくウニっぽい印象の男子生徒だ。

「上条当麻です。好きなものは特にないけど得意なことは家事全般です。これからもよろしく」

優良物件発見！と言わんばかりの(主に女子からの)視線が上条に突き刺さっていく。

輝夜も彼に目を向けていたが、その視線の先には上条当麻の右手に向いていた。

その後も自己紹介レースは続き、一方通行と同じように輝夜も居眠りを始めたのは上条の自己紹介の次あたりからだった。



入学式後のホームルームを終えると、本日の営業は終了いたしました、というように下校となった。

特に長居するつもりも無い輝夜と一方通行の二人はぶらぶらと校舎から出た。

そこへ、

「おいその二人ー！」

「ちよつと待つんだにやー」

帰路につこうとした二人を引き止めたのは上条当麻と土御門元春だった。

呼びかけては来ていないが、青髪ピアスもいる。

「なんだなんだ？」

「あア？」

「これから一緒にカラオケ行かへん？僕ら三人は前から一緒やったん

けど、どうせやしなあと思うてな」

その言葉に輝夜はチラッと一方通行に視線を向ける。ため息をつきながらも縦に首が振られるのを見て、

「いいね、じゃあ御一緒させてもらおうかな？」

「よーし、出発だにやー」

誘ってきた青髪ピアスではなく土御門の後ろをアヒルの子のようについていく団体。

蛇足だが、輝夜と一方通行はカラオケという言葉を知っているが実際に行ったことはない。

そのため、輝夜はもとより一方通行も若干楽しみにしていた。

『ヤッホーい！今日は夜中、いや夜明けまで楽しむにやー！』

場所は移って第六学区、とあるカラオケボックス。

輝夜はマイク片手に大声で叫んでいる土御門の横に座っていた。

「一発目はこの俺、土御門元春が行くぜい！」

イントロが流れ出した。

確かこれはシスコン主人公の某【ピー】がざっくり言っているいろいろ頑張るやつの主題歌だ。

土御門の得点は、92。422と結構高かった。

「おおー」

「さすがシスコン軍曹やー！」

「シスコン軍曹ワロタ」

輝夜と一方通行が声を揃えて言い放つと、土御門がギラリとこちらに視線を向けてきた。

『じゃあお次は輝夜くんと一方通行くんのデュエットだにやー？』

「なっ…！誰がそんなこと——」

「よおしいいぞおー！100点とってやるかなあ！」

嘘だろ!?!と一方通行が驚きながら輝夜に渡されたマイクを掴む。一応やる気はあるようだ。

『ふふふふふ、見てろシスコン軍曹！これが一般良民との差だ！』

「にやー…、一方通行ってロリコン…。」

『黙ってるシスコン軍曹オ！』

イントロが流れ始め、輝夜と一方通行の目の色が変わる。たかがカラオケ採点のために、八人しかいないレベル5が本気を出す――

『俺たちの歌を聞けエ！』

「「キャラ違ううううう!!」「」

そして、二人が叩き出した点数

—— 99 . 847 ——

「あー今日はマジで疲れたア…。」

家に帰って来るなり風呂に入り速攻でベットに沈む一方通行。輝夜は風呂に入る前に自室で寝ている。

「……まア」

今までの暗い路地裏にたたずむ自身と、今日カラオケで騒いだ自身を思い浮かべ、

「悪かねエな」

そう呟いて意識を夢へと飛ばした。

その呟きを、輝夜はしっかりと聞いていた。

## 表裏

とある日の昼休み。

「おーい一方通行〜！バスケやるから来いよ〜！」

「おっ、頑張つて来いよ？」

「めんどくせエ…」

そう言いながらも呼ばれた方へ行く一方通行。それを見て輝夜は嬉しそうに笑う。忌み嫌われていた彼が、クラスメイトたちと仲良く(?)している。たまにはあるものの、笑いあったりしていることもある。

孤独だった彼が、今は多くの友人を持っている。

「……よかつたね、一方通行」

「おーい輝夜ー！UNOやらねえかー！」

「いいね、やろうか！」

こんな日がずっと続けばいい。

いずれ終わるのはわかっている。

でも、そうだとっても。

今この時だけは、笑っていたい。

一瞬だけ険しくなった表情は、すぐにいつも通りの笑顔の下に隠された。



学校も終わり、輝夜と一方通行は帰る途中でスーパーに寄っていた。冷蔵庫のなかの食品が底をつきかけているため、買い出しに来ただのだ。

「今日の特売はそうめんか」

「季節的にまだ早エのになア…。ン、牛肩ロースタイムセールだよ」

「おう、サンキュー」

最近では一方通行も家計というものをわかってきたらしく、タイムセールや特売を気にし始めたらしい。一応二人の役割分担としては、

輝夜が炊事で一方通行が洗濯だ。なぜ一方通行が洗濯なのかというと、ボタン一つで終わるからだ。

ただ、洗い終わった服などをたたむのも一方通行の仕事であるため、その時だけは場違い感が凄まじい。

「ま、これくらいかな」

「さっさと帰って飯にしよオゼ…」

レジで精算を終え、二人は店から出た。見上げると満天の星空が夜道を照らしている。

「何だかんだあつたけど、もう六月も終わりかあ…。時間が進むのは早いね」

「時間を操るオマエが言うとならねエな」

だが、輝夜の言う通りだった。

一方通行もこれほどまで時間が早く進むとは思っていなかった。生まれて初めて、充実した時間というのを過ごした気がする。

クラスメイトとの交流は面倒だったが、楽しかった。授業を受けるというのも同じく面倒だった。でも、どこか新鮮味があつてなかなか面白いものだった。

「輝夜」

「ん？」

「一回しか言わねエからな」

自身をこの世界に引きずり上げてくれた親友に彼は、

「……サンキューな」

生まれて初めて礼を述べた。

一方通行がお礼を言ってきたことに輝夜は驚くも、  
「気にするなよ、友達だろ？」

笑顔でそう言った。

その後、二人は無言で帰路に着いた。



ほとんどの学生たちが夢の世界に飛び立った頃、輝夜は外に出た。いつも一緒にいるはずの一方通行は惰眠を貪っている。もちろん、それを確認した上で彼は外に出ているのだが。

彼の手には学園都市製の最新型の携帯。

彼は乱雑に電話番号を入力するとそれを耳に当てる。

呼び出し音は一切なかった。

ワンコールもなく、即座に相手に繋がったのだ。

「こんばんは、アレイスター」

『珍しいな。君から私に電話をかけてくるとは』

その相手は、統括理事会理事長アレイスター。直接会話ができる人物というのは恐ろしいほど限られている。だが、その恐ろしい確率の中に輝夜はいる。

「いや何、特に用はないんだけどね」

『時間操作の君が用もなく私に連絡を寄越すとは思えんがね』

「ありや、バレたか」

一見すると特に他愛のない会話だが、二人はお互いに思考を読まれないように話している。

輝夜はいつもの笑顔を浮かべてはいるが、目は一切笑っていない。

「じゃあ早速本題だ。……一方通行に手を出すな」

『……………』

「バレてないとも思った？絶対能力者計画に一方通行を使うってことが」

『…時間操作にはいつも驚かされる。秘密裏にされているはずの計画が知られているとはな』

「アイツは光を知った。光の中で生きようとしているアイツを闇に引きずり込むってなら——」

輝夜は表情から完全に笑みを消し、

「—————テメエの計画全てをぶち壊してやる」

『面白い、時間操作は一定の代償が必要なのだろうか？その代償は、使用者自身の生命活動時間。すなわち寿命だ』

「それがどうした？」

『…………』

輝夜は再び笑みを浮かべる。

だがそれは、冷酷で残酷な笑み。

昔、輝夜のこの表情を見て、あの一方通行が無力化されたほどの笑み。

「俺の時間操作を舐めるな。寿命が削られる？その程度、とつくの昔に克服してんだよ」

『なに…？』

輝夜は笑う。

電話の向こうにいるアレイスターが、自分の能力を見誤っていた事に。

「まあ、一方通行に手を出さなきゃいいだけだよ？その結果、お前の計画の一つがストップするけどね」

『ふっ…………』

「ん？」

『たかがレベル5に、私の計画は潰せんよ。それがたとえば、時間操作だとしてもな』

『…………』

輝夜は目を鋭くして耳を傾ける。

『もしその時間操作が私の計画の邪魔になると知っていたなら、発覚したその日に殺している』

「だけどそうしなかったのは何故か。簡単な話だよ、俺も計画の一部に組み込まれてるから」

『正解だ。もちろん、今のように私を脅してくるのもな』

「そっか、残念だな。イレギュラーじゃなかったのか。まあそれはいいとして、これは交渉決裂だね」

『そう受け取ってもらって構わない』

輝夜は肩をすくめ、いつもの笑顔を浮かべる。今まで彼を取り巻いていたおぞましい気配は消え去り、朗らかな空気が包む。

「じゃあね、アレイスター」

『君と話すのはいい暇つぶしになる。また気が向いたらいつでも電話』

をかけてくるといい』

通話が切れ、輝夜は端末をポケットにしまう。そして、いつものように彼は寮に戻る。

LEVEL5序列第一位が惰眠を貪っている中、第八位と統括理事会理事長はそれぞれの目的を再確認する。

——一方通行を守る（使う）

接点が全くないと言っていい程の二人は、微笑む。

喜怒哀楽の全てに当てはまり、同時にどれも当てはまらない説明不可能な微笑みを。

たった今、この二人は見えない戦いを始めた。

翌日。

輝夜と一方通行の二人に高校に入ってから、第一の試練が訪れようとしていた。

「学園テストだにゃー……」

「ワイらもうおしまいや……」

「不幸だ……」

「そこまで嫌なの？」

「授業さえ真面目にやってりゃわかんだろうが。つか、青ピ。テメエ試験追試になったらあのロリ先生と夏休み中ずっと一緒に過ごせんじゃねエの？」

小中高のすべての学校において、多くの生徒の精神を削り、心をへし折るイベントがある。

——テスト——

このテストは能力開発に関係するものではなく、世間一般において学生に求められるごく普通のもの。

要するに、頭の出来を調べるためのものだ。

「むむっ、それもそうやん！良い点取ったら褒めてもらえるし、悪い点やったら夏休み中ずっと一緒に居られるなんて…。そう考えれば、なんてええ行事なんやろうかッ…！」

「青ピは気楽になれていいにゃー……。俺なんて点数が低かったら舞夏の飯が一ヶ月抜きなんだぜい……」

「補習なったらバイトができないのです……」

一方通行の言葉に回復する青ピと、そんな青ピの様子を見てさらに落ち込む土御門。上条は特に変わらずドヨンとして窓の外に目を向けている。

「…っか、なんで輝やんと一方は余裕そうにしてるのかにゃー？」

「僕も気になる話やね…。いっつつもトツプクラスの点数叩き出してる理由を言うてみい…」

「…テストの悪点数という幻想をぶち殺す……。ついでにお前ら二人が好成绩だという事実もぶち壊す……！」

土御門の言葉に青ピと上条も便乗してきた。

最後の上条だけが見事なまでに脅迫をかけてきて輝夜と一方通行は少しビビった。

「い、いや。ちゃんと話を聞いてればわかるよ？」

「「はあ!？」」

「輝夜の言う通りだ。あんなの予習復習さえしてりやアいくらでも点数取れんだよ」

一方通行のまともな発言に輝夜も含めた四人は驚き、それを見た本人はこめかみをヒクヒクさせていた。

ちなみにテストの結果は――

学年一位　　一方通行／輝夜永斗

学年八十二位　　上条当麻

下から数えて五位　　土御門元春  
一番下　　青髪ピアス

ちなみに、彼らの学年の総生徒数は284人である。

悪魔のようなテストが終わり、結果が配られた当日。  
クラスでは、

「むー、一方通行と同列かあ」

「俺より下になったら腹ア抱えて大笑いしてやる」  
全教科満点でいつも通りになっている二人がいた。

また他には、予想よりも上の順位を取って、

「珍しく不幸じゃなかったあああああッ！」

と叫んでる黒髪ツンツン頭がいたり、

「にゃー…義妹の飯………」

とガッツリへこんでる金髪サングラスがいたり、

「小萌センサーと補習♪小萌センサーと補習♪」

学年最下位という汚名を喜んで小躍りしている青髪ピアスといっ  
た、クラスの三馬鹿もそこにいた。

そして、穏やかで平和な時間は流れる――

## ゆがんだ絆

統括理事会理事長の『人間』アレイスターは、窓のないビルの一室にいた。

その四角い部屋の真ん中には円筒形の生命維持装置が鎮座していて、彼はそこで逆さまに浮かんでいる。満たされた赤い液体は彼の口や鼻から体内へと浸透していき、細胞一つ一つに干渉していく。

そんな中、彼は笑っていた。

無垢な子供のような、悪意に塗れているような不可解な笑みを浮かべていた。

(序列第八位、タイム・オペレーション時間操作か)

アクセラレータ一方通行に手を出すなど言ったあの少年。

LEVEL5など軽く超えている能力を持っていた彼が、今ではその影もなく偽りの日常を送っている。

(アレの覚醒を待つよりも第一位を引きずり込んだ方がプランの進みようが早いか)

彼の視線は、虚空に浮かぶ映像に向いていた。

そこに映るのは、仲良く食事を摂っている第一位と第八位の姿。

その様子を見たアレイスターの目に、ほんの一瞬だけ怒りの色が見えた。

しかしそれはすぐになくなり、彼はコマンドを打ち込んだ。

【絶対能力進化計画】

学園都市の闇がうごきだす。

輝夜と一方通行は第七学区の通学、または帰路を歩いていた。

先ほど昼食を食べ終え、寮の部屋に向かうつもりだったが、諸事情によりそうはいかなくなつた。

何故なら、

「頼む！宿題一緒にやってくれ!!」

「……、は?」

公衆の前なのに、目の前で土下座するツンツン頭の友人に足止めをくらったからだ。

一応ツンツン頭の友人、上条当麻も同じ寮で生活しているので、『そのまま一緒に帰ればよくね?』という感じなのだが。

「えーっと、一方通行さんどうします?」

「十二急に畏まってやがる。俺は知らねエぞ」

早々に面倒事から逃げる一方通行に輝夜は頭を抱えた。

（いやわかってたよ?そう言われるのくらいわかってたよ!?!でもさ、でもさ……!）

「俺一人に押し付けるのはよくないと思う!!」

「忙しいヤツだなア！俺がなんで家庭教師みてエなことしなきゃならねエんだよ!」

「あのー、もしもしお二人さん?わたくしめの事を忘れないでもらいたいのですが…」

「黙ってるろ不幸野郎!」

「八つ当たりしないでもらえます!」

結局上条の宿題係を決めるのは後日となり、二人は上条と別れた。

「つたく、他人の世話なんつーことア絶対やらねエからな」

「それも友達付き合いとしては大切なことなんだよ?せっかくの経験だし、ここは一方通行に任せる」

「うまく押し付けよオとしてんじやねエぞ?!」

「なにおう!?!俺は面倒だからとか面倒だからとか面倒だからとかそんな理由でお前に言ってるんじや無いんだからね!」

「……、ツンデレっつーヤツにでも目覚めたのか?」

「………違うと思いたい」

二人は今日も仲良しである。

「あつ、やべ忘れ物した」

「相変わらずだな…」

あわあわと慌て始めた輝夜は深いいため息をつくど、

「先に帰っててくんない？できればお湯を沸かしていただけるととても助かる」

「チツ、まアそんなくらいならやってやる」

口論しても二人は結局何事も無かったかのように過ごさせる。それくらいまで、二人の友情は深いのだ。

輝夜はスタスタと忘れ物を取りに先ほどいたファミレスに足を運んでいた。忘れ物というのは学生証だ。

「別に無くしたら新しく発行してもらえばいいんだけどねー」

そうボヤきながら輝夜は目当ての学生証を取り戻し、再び歩いてきた道を引き返そうとした。

「ん？」

店から出て二十メートルほど歩くと、黒いスーツを着用したと男たちが目の前に立ちふさがった。

「どちらさんでしょうか？」

「君と話がしたくなっただけの者だ」

男達の内の一人、おそらくリーダー格のやつだろう。彼がそう答えた。

「いや、俺に話すことは無いんで。通してもらえますか？」

「残念だが、それは無理な相談だ」

「ええ〜？」

いつも通りになっている輝夜だが、見るものが見れば気づいた。結構イラついていることに。



「なんで通してくれないのか教えてもらってもいい？」

「君の友達、一方通行くんが今忙しいからね。その邪魔をしないように……」

「じゃ、さいなら〜」

「!？」

一方通行の名が出た瞬間、輝夜は能力を発動させた。目の前にいる男たちは、体感時間を止められたことに気づいていない。それもその筈。

書庫にある輝夜永斗の使用能力は、パイロネキスト発火系能力者となっているからだ。

どのように人の壁をすり抜けたのかわからず戸惑う男たちを尻目に、輝夜は寮へと走る。

(変なこと仕込まれんなよ……!)

一方通行の無事(?)を祈りながら、彼は走った。

一方その頃、一方通行は寮の手前で、

「ナンだア、テメエらは？」

輝夜と同じように、黒いスーツを着用したと男たちに声をかけられていた。彼の表情は絶賛不機嫌ですと言わんばかりに眉間にシワが寄っている。

「君に聞いて欲しいことがあってね」

男達の内の一人が言い出した。

「ハッ、生憎聞くつもりなんてねエよ。俺アさっさと帰ってやんなきゃならねエことがあるだ。どけよ」

「輝夜永斗のことなんだがね」

「……アイツには手エ出すんじゃねエぞ」

生まれて初めてできた友にして、自分を闇から引き上げた恩人。

そんな彼に手を出されるなどということは、一方通行にとって何よりも耐え難いものだ。

男はそれを完全に分かり切ったような顔をする。

「私達は何もしない。するとすれば、君自身になるだろうけどな」  
「……どオいうことだ」

一方通行は、何時でもこの男たちの首を刈れるよう構えた。しかし目の前の男たちは誰も怖気づくことはない。それ以前に余裕さえある。

(ナニを考えてやがんだ…?)

目の前の男たちは構えもない。

そして、一人の男が言い出したことは、

「君は今の自分に、満足しているか？」

「……、はア？」

完全に威勢を削がれる問いに、一方通行は思わず問い返した。

「君は学園都市のLEVEL5、序列第一位ということはもちろんわかってるね？」

「当たり前だ」

「序列第一位ということはどういう意味か、わかっているね？」

「んなこと決まってるだろオが。俺がこの街で『最強』だったことだ」  
「本当にそうかな？」

男の言葉に、一方通行はカチンときた。

彼が言い返す前に、男は続ける。

「君は前に、学園都市LEVEL5序列第八位である輝夜永斗くんに負けている」

「……だからなんだってんだア？」

「わからないのか？ようするに——」

男は一度呼吸を置くと、

「君は最強などではない」

言い切った。

今度こそ一方通行は能力を発動させ、足の裏で軽く地面を踏んだ。それだけで、一方通行の足元の砂利が、地雷でも踏んだかのように爆発した。

男たちはとつさに両腕で顔を庇ったようだが、衝撃だけで勢い良く後ろへと吹き飛ばされていった。

「この程度を止められねエオマエらに、俺を否定する権利があるとも思つてんのかア…？」

「素晴らしい力だ」

「……！」

一方通行は眉をひそめ、吹き飛ばされた男の一人を見る。

おかしい、と彼は思った。

擦り傷ひとつ、見当たらない。

「だが、『最強』の力はそれくらいだ」

「……、よっぽど殺されてエみてエだな」

「輝夜永斗くんが憐れむのも無理がない」

「憐れむ、だと……？」

トドメを刺そうとした一方通行の動きが止まる。

「『最強』がどう足掻いても勝てる訳が無い。なんて可哀想なやつだ。

『最強』という幻想にしがみついている三下なのに、この俺の友達？笑わせるな、とでも思っているんだろうね」

「ふざけンじゃねエぞ……！」

「『最強』じゃないやつが第一位？第八位にすら敵わないやつが第一位？」

「ふざけンじゃ……！」

「見返そうとは思わないかい？見返そうとは」  
「……！」

二回も同じことを言い、『見返す』という言葉を不自然なまでに強調して男は言った。

「君はあの時間操作を超える……、いや。この世の誰よりも上の『無敵』に、前人未到の絶対能力者になる気はないか？」

「絶対能力者だと？」

「時間操作の彼は、君のような『力』はない。その圧倒的な『力』を持つ君が、『最強』のまま止まっていれば、いつまで経っても彼に見下されたままだろう」

一方通行は黙り込んだまま、ただ男を睨む。

話し続けた男はポケットから一枚の紙を取り出した。

「今すぐ決めろとは言わない。LEVEL6への道を歩み始めるのはいつからでもいい。じっくり考えて決めることだ」

そしてその紙を一方通行の手に握られているコンビニのビニール袋の中に入れた。

「そこに、私たちの研究所の場所が記されている。いつでも待っているよ」

そう言い残して男たちは立ち去った。

背が見えなくなってから、数分経っても一方通行は動かない。

「一方通行！」

「……、輝夜か」

今の彼の思考を占めるのは、ただひとつの疑問。

——オマエは、本当に友達なのか……？



一方通行は輝夜と上条と別れた後、昨夜謎の男に渡された紙に書かれた研究所に向かった。

——輝夜永斗くんが憐れむのも無理がない

「……チツ」

あの男の言っていた言葉が蘇る。

輝夜の様子からは、そんな感情は見られなかった。

——『最強』じゃないやつが第一位？第八位にすら敵わないやつが第一位？

確かにその通りだ。

一方通行は一度、輝夜から（ただの喧嘩とはいえ）負けた。それに關して、今までどうと思つたことはない。ただの喧嘩だからと、気にしないでいた。

だということに、

——見返そうとは思わないかい？見返そうとは

そうこう考えているうちに目的地の研究所に着いた一方通行は、白衣を着た研究者に案内された。

その者の態度は歓迎そのもので、この先得られるであろう成果に涎を垂らしているようだった。

「今回君にやってもらうことは簡単なことだ」

「……」

「二万通りの戦闘を行つてもらおう」

「はア？二万通りだと？」

「まあ最後まで聞きたまえ」

詳しく説明を受けたところこれから行う絶対能力進化計画とは、『樹形図の設計者』が導き出した二万通りの戦闘を行うというものらしい。そう聞かされながら歩き一方通行は、

（二万通りってことは、何年かかるんだよ……）

そして、たどり着いたのは一枚のドアの前。

金属性のそれが横にスライドした瞬間、一方通行の視界に壮大な情

景が飛び込んだ。

「!?」

「これらが、君の相手となる人形だよ」

そこにあつたのは、無数の培養器。

円柱状で液体に満たされたそれ一台の中に浮かんでいるのは、一人の少女。

年齢は一方通行よりも少し下ほどと思われる少女たちは、まさしく生まれたままの姿で創り出されていた。

「驚いたかい? さすがにクローンとまでは、予想していなかつただろう?」

学園都市に未だ誕生していない絶対能力者の領域を開拓するには、それ相応に、過去に類を見ない質と量の『材料』が求められるとは予想していたが、生物の倫理をここまで崩壊させたことは想定を完全に裏切っていた。

「――ハハッ」

思わず笑いがこぼれた。

「あははぎやはあははははッ! イイねイイね最っ高にイイねエ! 研究者つてとこの騒ぎじゃねエぞこれはア!」

口を開け、歯と歯茎を露わにして愉快に悦楽に浸る彼を、研究者達は狂喜の笑みを浮かべ眺めていた。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「うだー……」

「声に出してうだーって言うヤツ初めて見たわ」

一方通行が実験内容を知った頃、輝夜は上条らクラスの三馬鹿とボーリングを終え、三馬鹿のうち上条以外の二人は、

「二次会と洒落こもうぜい!」

「合コンか!? 合コンやな!? よっしや行くでー! 今夜はパレードや!!」

などと手に負えない始末で、輝夜と上条は気づかれないように出てきたのだ。

そしてその帰り道の途中、路上にポツンと立つジュースの自販機に寄っていた。

「喉乾いた」

「……、上条くん。お金はあるのかい？」

「ボーリングで全部巻き上げられました……」

学生らしからぬ（大人になってもしちやダメ）賭けボーリングをし、上条は見事に最下位を獲得した。無駄な負けず嫌い精神で数ゲームした結果、全額巻き上げられたのである。

「……（ウルウル）」

「男の涙目って気持ち悪いからやめろ。……、わーったよ!!買うよ買えばいいんでしょ!？」

「ありがとうございますありがとうございます!!」

「ここで土下座するなあ!!」

たかが百円（されど百円と上条は言う）のジュースのために土下座された輝夜は、千円札を自販機に滑り込ませた。

「……」

「……」

「……………」

待つこと数秒。

自販機、応答なし。

「……、なあ上条」

「……、なんでせうか輝夜様」

「これ、壊れてる?」

「たぶん、壊れてる」

頬をヒクヒクさせながら、とりあえず輝夜はお釣りのレバーを動かす。

だが、反応がない。

ガチャガチャ!!と何度も動かすも、やはり反応がない。

「……」

「か、輝夜くん……?」

「上条……」



「はいッ!!」

「セリフ、借りる」

「どうぞッ!!」

スー……、ハー……

輝夜が呼吸を整えているうちに、上条は耳を塞いだ。

そして、

「不幸だああああああああ!!」

「ちよちよちよッ!?!自販機蹴るな蹴ったら警報なるって!!」

「うるせえ!!野口さんの恨みを思い知れええ!!」

「ぎゃー!!自販機ダメだからって上条さんを蹴らないでー!!」

ある意味混沌と化した自販機の前。

そんな、やかましく騒ぐ二人の耳に、カツつと革靴の足音が聞こえた。

「ちよろつとー。自販機の前で騒いでんじやないわよ。ジュース買わないならどくどく。こちとら一刻でも早く水分補給しないとやってらんないんだから」

と、いきなり声をかけられたと思ったら、女の子の柔らかい手が騒ぐ二人の腕を掴んでぐぐーつと自販機の横に引つ張った。若干ドキリとしたらしい上条は動きを止めたが、野口さんの恨みを果たせぬままズラされた輝夜は、

「うがー!!せめて一撃いい!!」

「やっかましいわッ!!」

少女が怒鳴った瞬間、その茶色い前髪から青白い火花がパチンと散った。

ゲッ!? と何かを感じたらしい上条は右手を突き出し、怒り狂った輝夜は周囲の時間の流れを止めた。

少女の額から角が生えるように青白い雷撃の槍が、二人に目がけて光の速度で襲いかかった。

伸びた雷撃の槍のうち、一本は上条の右手に打ち消され、もう一本は家具の目の前でピタリと動きを止めた。

「あつぶねえな御坂!!」



「それより御坂。お前この自販機でジュース買おうとしてたようだけど、どうやるつもりだったんだ？」

「ふふーん、裏技があるんですよ。お金入れなくってもジュースが出てくる裏技が」

その言葉ですべてを理解した輝夜は、あーあ、と空を仰いだ。理解出来ていない上条は目を瞬かせている。

美琴は自販機の前で軽くステップを踏むと、

「輝夜先輩の持っていた野口さんの恨みいい!!」

ちえいさーっ！ という叫びとともに、自販機の側面に上段蹴りを叩き込んだ。

すると、自販機の中でガタゴトと何かが落下する音が響き、取り出し口から缶ジュースが出てきた。

「こんな感じ——つてどうしたの？」

「ナンデモアリマセンオジョーサマ」

輝夜と上条にとって御坂美琴と関わるのは、あらゆる方面から疲労という名の攻撃に晒される気分になるものであるということに、この日はじめて気づいた。